

座談会



公募展を検討する

出席者

(写真左より)

- 国松 登
- 佐藤 哲之助
- 谷口 一芳
- 本田 明二
- 原 義行
- 柄内 忠男

司会 本田

5月15日 午後6時
産業会館で

—近ごろ公募展存在是非論がとり上げられています。つまり存在意義がなくなったのではないかとということなのだが。はたして大衆との結びつきがなくなったのか、また結びついているとしたら、どんなふうにつながっているのか。こうした話を軸として道内公募展の役割を、語っていただきたいのです。

先ず無用論がどこから出て来たか、ということから始めたら。

国松 無用論とか公募展が黙殺される傾向は美術ジャーナリズムから起きているので作家側から出された問題ではない。ただ公募展が無性格になったから、そんなことがいわれるのではないのでしょうか。

原 会が情実で結びついたりマンネリズムになっている点も批判されていますね。

柄内 公募展がどうして生まれたかを考えると一つのイズムによって作られたので、例えば印象派などそうでしょう。日本の中央の各団体にしても、はじめはそうでした。

国松 いまの公募展では古いものに対する抵抗の主張が弱くなっています。お互いに認め合って審査するようになったので無性格になったといわれるのでしょうかね。

谷口 いまは個性が尊重される時代ですから、団体としてのイズムがなくなつたのでしょうかね。

国松 個展会場が多くなり、個展をする人が多くなつたのも一つの原因だ。個性は公募展に出品しなくとも主張できるわけだ。一方ジャーナリズムにとっても個展のほうが、その作家の仕事ぶりがよく分るので飛びついて行く。



北海道で生まれる!!

トヨーゴム靴



東洋ゴム工業株式会社

札幌トヨーゴム株式会社

原 たしかに公募展で一、二点を見るより、作家の力量がわかるが、それだけでは若い作家は中々認められない。

—なるほど。それではジャーナリズムだけが『無用』といっているのでしょうか。



佐藤 ぼく自身は無用とは考えませんが、作家のほうから無用論は出ている。という事は、公募展に対する攻撃ではなく絵画界自体への、ひとつの不満の現われだと思っております。無用論を唱える人は『外国はこうだ』といっているようですね。

—画商が選んで個展をさせています。

国松 しかしそれは弊害があるはず。
柄内 昨年見たイタリアー展は選抜展でした。出品した三十人あまりの作家が全部、なんらかの賞をもらっている。つまり外国にも日本以上に公募展はあるということですね。

佐藤 さっきチャット話に出ましたが公募展は親分子分のつながりが多いというのはいい警告です。しかし芸術界では、いまそのつながりが一番薄いのではないでしょうか。一歩そとへ出ると政治、会社、そして学校の中にまで、いやな関係が持ち込まれています。私たちは芸術家ということからきびしく自分を見つめているおかげか昔ほどではない。

—材料と個性の発達が芸術の世界から親分子分のつながりを取りはらったと思いませんか。

原 いままで新人でも面白い個性的なものを画くと、すぐ注目される。材料の進歩も職人—弟子という関係を薄める役割を、たしかに果たしています。

国松 ところが公募展の入落は作家の生活を規制するようになってきた。新しいヒモが生まれてきたようですね。

—それでは『欠陥』を離れて日本の公募展が果たしてきた成果、役割りに話を移しましょう。

原 いろんな作家は公募展を足場にのし上がっていったので、公募展がいまの画壇を作り上げたいといってもよいでしょう。

佐藤 そう、大正時代の白樺派にしても公募展のおかげ、いま公募展無用論が出てきたのは、逆にそれだけ造形芸術が発達してきたといえるのではないだろうか。

原 それに公募展は大衆に芸術をダイジェストして見せてくれる。これは一般人には有難いことじゃないかな。公募展は作家ばかりでなくそうした面で社会の文化面に大きく働いていることになる。

谷口 だれでも自分を試すのに、すぐ個展は開けないですね。




国松 作品を価値づけると同時に一般に知らせるという意味を持つわけだ。また個人作家の主張としては個展でいいが『運動』としては、どうしても協力体である公募展が必要ですね。それに主張に共感するかくれた作家を発掘、集中させるためにもね。

柄内 ビカツは十六歳のときマドリッドの公募展でトップ賞をとった。これで自信を持ったわけで、大きな意味がくみとれます。やはり自信というのは、なにかに価値づけられて生まれるものだと思います。

—公募展はとやかくいわれながら大きな役割を果たしてきたし、今後もそうでしょうね。ではこんどは本道の

イゼルペイント

 いーぜるばす

資生堂

えのぐ



公募展について一本道に公募展ができたのはいつごろからですか。

谷口 ぼくが聞いたのでは小樽に初めて出てきて、それから道展が生まれたということですね。

国松 そういえば大正の初めごろ、ぼくも出品しましたよ。確か小樽のものは太地社だったと覚えてます。

栃内 道展はたしか大正十四、五年ごろにできたはず。谷口 公募展のスタートは中央に比べると、いくらか遅れていますが地方としては早いほうですよ。



原 本道の公募展も中央がやったと同じように功績が多いと思います。たくさん作家を育てたということで公募展は道展ですが、

まりないでしょう。

佐藤 全国的なものとの違いは、「派」としてではなく、つまりもっと広い意味でね。

—全道展の誕生は—

栃内 戦争によって絵をやるのが困難になったけれど、戦後、文化国家再建というテーマが生まれた。中央にいた道出身者が、まず道で立ち上がりつとファイトを燃やし、ここで全道展がスタートしたわけですね。

谷口 道展の功績は大衆の結びつきを強化したこと。しかし逆に甘さが出てきた。——といったところから全道展が生まれたともいえますね。

国松 話が前後しますが公募展は他の作品と比較検討する場所です。自分で自分を評価する、実験するところですね。

佐藤 そう。その話にもからんでいます。道展と違って、もっときびしいものから出発したのが全道展でしょ

う。ちょっといいにくい言葉ですが、つきつめて考えると美術教育はいわゆる先生の絵といわれているものではない。逆に本当の美術教育者になろうとすれば本当の芸術家にならなくてはいいけない、ということでしょうね。

谷口 道展がいけないというのではなく、きびしいものを求めようとする気持が大切なのです。



—しかし道内に二つの公募展があるのは決してマイナスではない。むしろ二つがあつて道内美術のひとつのムードを作り上げている。張り合いも出てくるわけです。では全道展の今後の問題、あり方について—

国松 全道展はまとまった主張が集まったのではなく、それぞれ純粋に各自の個性を出すのをねらいにして生まれたもの。だから個性の強いものを尊重し、それをさらに伸ばしてやるべきです。



栃内 いい作家は三点でも四点でも並べるようにしたい。—しかし、それは会場の面など実際にはムリでしょう。ただそういう機会はどんどん作って行くべきでしょうね。

佐藤 知人に聞いたら『全道展はワカラン』という抽象だけ、または具象だけを集めるのではなく、絵としてよいものを探るべきなのでしょう。この点確認したいと思います。

原 全道展は具象非具象という表現様式にはこだわっていない。具象より非具象にいいものが多かったので自

◎最新型カメラ各種多数陳列

◎あなたのカメラを新型と交換致します

カメラのことなら
何んでも御相談下
さい

カメラのデパート

札幌カメラ

ススキノ角 電話②8914③6785

